

Title	<批評・紹介> 小林高四郎著「元朝秘史の研究」
Author(s)	井ノ崎, 隆興
Citation	東洋史研究 (1955), 13(5): 425-428
Issue Date	1955-01-20
URL	<a href="http://dx.doi.org/10.14989/139015">http://dx.doi.org/10.14989/139015</a>
Right	
Type	Journal Article
Textversion	publisher

## 元朝秘史の研究

小林高四郎著

日本學術振興會刊  
(ユーラシア學會叢刊第二)  
四二六頁 定價六〇〇圓

ひところ、隆盛を極めた滿蒙史の研究が、最近とみに停滯してゐた事實は否定出来ないが、近頃になって「慶陵」の如き研究の輝かしい成果がぼつぼつ現れてきた事は、斯界にとつて喜ぶべき事である。ここに紹介しようと思ふ小林高四郎博士の「元朝秘史の研究」も、それが、かつて博士によつて遠く滿蒙の地で始められてから爾來實に二十年の歲月をへて見事に結實した成果なのである。

塞外民族の研究は、いずれもそうであるが、蒙古の場合は、蒙古民族の言語に精通するか否かに研究の成功がかつていゝと言つても過言ではない。今更言うまでもないが、博士は言語學者として蒙古語は勿論、多くの語學に精通され、その上、歴史學者としても、資料の博搜と正確な考證とに秀で、まさに元朝秘史の研究者として最適任者の一人であつた。何より證據、本書を一讀すれば、隨處に見られる言語學と歴史學の兩立場からの正確な徹底した考究に、吾吾は感心せしめられるのである。

さて、本書の構成は序説に續いて本論十一章から成るが、これを内容的にみると二つに大別出来る。即ち、第四章までは本論に入る前の準備的な諸研究であり、第五章より以下は書名に掲げる通り、「元朝秘史研究」そのものである。以下各章について紹介し、最後に紙數の許すかぎりにおいて疑問を掲示してみたいと思う。

先ず序説であるが、それには副題として「元朝秘史研究小史」と

附せられている事からも推察出来るが、これは博士も言われているように本書の讀者の理解を容易ならしめんとする心ずかいからであつて、七一頁にも及ぶ丁寧なる説明はそれを物語つて餘りある。しかし、ここでは、ただ、そこに記載してある有名な元朝秘史研究者を摘出して、著名著書とともに列記してみよう。

〔中國〕 萬光泰(清の乾隆十三年、即ち、一七四八年に元朝史略上下二卷を撰) 李文田(元朝秘史注十五卷を撰) 高寶銓(李注補正十五卷を撰、秘史の地理に關しての研究者としては、施世杰(光緒二三年、即ち一八九七年に元秘史山川地名攷十二卷を撰)、丁謙(元秘史地名考證)、陳垣(一九三三年に元朝史譯音用字攷を撰)

〔ロシア〕 パラディイ僧正(張穆の連筠移叢書本からロシア語譯本を撰し、一八六六年、これに附するに、チンギス・ハンの古き蒙古の物語を著した)、ボズドニエフィチ(勞作が詳でなく)、コージン(ロシア語譯註、即ち、Sokrovennoe Skazanie, Moskv-Leningrad, 619 SS. を撰)

〔ドイツ〕 ヘーニシュ(一九三一年に部分的な譯註を撰してからそのローマ字轉寫本、秘史の語彙辭典、ドイツ語譯註と、所謂四部作がある)、一九四二年夏、ソ聯よりドイツに入國、移籍し現在アメリカに在る、ポッペ(一九四四年の Asia Major 誌復刊第一號の漢音譯秘史原典のバク・パ字轉寫説を排した有名な論文の外種々の研究がある)。

〔フランス〕 ペリオ(秘史表題考を始め多くの研究がある)

〔アメリカ〕 蒙古學者の皆無であつた米國は、第二次大戰以後著名な學者が居る。ベルギー國籍のモスターエルト神父(一九四九年の A propos du mot Siroja de l'Histoire secrète des Mongols,

を始め多くの論文がある)、ポッペ(前出)、クリーヴス(祕史の英譯を始め、近來、論文を發表している)、中國出身のワイリアム・ホン(文獻學的な論文がある)。

〔日本〕那珂通世(一九〇八年に成吉思汗實錄を撰)を始め、内藤湖南(蒙文元朝祕史、史學雜誌十三卷三號)、金井保三(元朝祕史漢譯の年代、同上補正、東洋學報一、二、三)、稻葉君山(元朝祕史漢譯の年代辨疑、東洋學報一、三)等で現在の學者は省略する。

第一章 「實錄、國史及び脱必赤額」は、祕史が開國より太祖をへて太宗までの實錄であつたからには、順序として實錄、國史、脱必赤額の考察から始められたのは當然である。即ち、實錄は漢文で記述され、時に蒙古語に譯されて天子に上進されたものであり、國史は脱必赤額とも呼ばれ、蒙古文で書かれ原則として合罕に進奏せず、奎章閣に祕藏して何人も閱覧が出来なかつたと兩者の差異を明瞭にされた。

第二章 「Altan-debter に就いて」では、蒙古史々料として東方の脱必赤額と相並んで重視されながら、その性質について甚だ明確をかく、ラシード・ウッディーン著の Jami-ut-Jevanikh (集史)に見える Altan-debter (全冊)について考察された。那珂博士等の「全冊は修正祕史にして、宮廷の祕事は忌諱されて、改變刪筆された」との解釋を批判して、むしろ原本祕史と考えるべきだと主張されてゐる。

第三章 「所謂 Altan tobči nova に就いて」は、元朝祕史の研究に重要な役割を持つ清初のルブ・サン・メン・サンの寫本を詳しく紹介し、此の書は明末か清初に、ウイグル・モンゴル字に轉寫された祕史を底本として出来たもので、それが編者によつて改竄され

ていても、現行祕史校訂の謗證となし得ることを明かにされた。

第四章 「聖武親征錄について」に於ては、同じく祕史研究に重要な關係をもつ聖武親征錄について撰述年代やその性質を闡明しておられる。從來、此の書は中統四年(一二六三年)時人の撰上とか(四庫全書提要説)、察罕が仁宗の敕命を奉じて譯出した聖武開天記と同一書であるとか(那珂博士説)、之を以て實錄稿本に出するものとか(石濱教授説)いわれたが、博士は鋭い考察から撰述年代を、世祖の至元年間、より詳しくいえば至元二十二年以前と推斷された。又その性質については漢譯脱必赤額と見るのを謬説と指摘して、ラシードの據つた東方諸資料のうちの一種と藍本を同じうするものであるが、決して直接蒙古文からの漢譯ではなく、既に漢譯されていたか、或は最初から漢文を以て記された一種の實錄の節略本であると推測された。

第五章 「元朝祕史の書名と撰者」に於いては、元朝祕史と呼稱して來た此の書の正しい原名は何であらうかとの疑問を掲げて、その解答に石濱教授の「今本元朝祕史の正集は元來成吉思汗源流と稱し、後に續集を附加し、至元修史の頃に至つて蒙古祕史と題せられた」と言う説を支持し、蒙古祕史は「至元修史の頃及びそれ以後の脱必赤額の總稱であらう」と論ぜられた。次いで、漢名元朝祕史の下に兩行細字で記された「忙豁命紐察脱察安」の忙豁命が、hang-ho-1であるのに、何故に moyol を寫すのに用いられたかの理由を説明し、最後に撰者については、パラディイ僧正の「恐らく事件そのものを目覩せし者か、又は成吉思汗の時代を距ること違からざる若干の人々によつて敘述された」と言う見解に同調され「國家の最高斷事官であつた失吉・忽都忽達」と主張するヘーニッシュ教授の

説やその他の異説を斥けられた。

第六章 「元朝秘史の成立年代」では、例の有名な元朝秘史の續集卷二の奥書にある「大忽哩勒塔に會して、鼠の年七月に客魯噠河の闊迭額阿喇勒の朶羅安孛勒答黑失勤斤扯克兩の間なる斡兒朶思に下馬して居る時書きて畢へたり」の鼠の年を根據にした年代推定には今迄多くの異説があつた。例えば、(1)清の丁謙の太祖即位の前年の戊子(一二二八年)、(2)清の徐松の太宗崩御の前年たる庚子(一二四〇年)、(3)清の萬光泰の定宗憲宗の以前ではなく至大以後(一二四〇年)、(4)ルネゲルセー氏の憲宗の壬子の年(一二五二年)、(5)植村清二教授の太宗十二年以降(一二四〇年)、(6)ウィリアム・ホンの氏の世祖の至元元年(一二六四年)等がそれであるが、博士は嚴密な獨自の考究の結果、世祖の至元十三年以下の實錄編纂の事が行われた二十三年後に、斷片的な未整理の儘のトプチャンを整理補綴し、かくて古くから存在したトプチャン「成吉思皇帝の根源」なる書名の部分」を追増せられて蒙古脱不赤顔又は忙豁命脱「ト」赤顔とされたのたろうと推定された。

第七章 「元朝秘史漢字音譯の年代」に於ては、華夷譯語の成つた(但し語彙のみ)洪武十五年を境として、それより以前と見做すのと、以後とする見解のあることを紹介された。ペリオや服部四郎教授等はその前者の説であり、陳垣氏等は後者であつた。博士は詳細な考察から陳垣氏と同説に達せられた。即ち、洪武二十二年(一三八九年)以後同三十一年に至る間であると主張されたのである。

第八章 「中期蒙古語の諸問題」では、ウラヂミルツォフ及びポッペの所謂「中期蒙古語」の諸特質に就いて考察されている。

第九章 「元朝秘史とパク・パ字文献の言語」に於ては、次章の

準備ともなるので、著者の考えを加えながらポッペ教授の「蒙古方形文字文献の言語と元朝秘史」を詳しく紹介し、同教授が元朝秘史の原典がパク・パ字本なりと推斷し得ない事を主張されたのに賛同されている。

第十章 「漢字元朝秘史の原典」では、祖本秘史の成立がパク・パ文字の制定以前であつた歴史事實から、それがウイグル文字で書かれていた事は誰しも疑いないが、漢字音譯本秘史がそのウイグル字本秘史から轉寫された主張したパラディイ、那珂、ヘーニシュ等の説に對して、陳彬龢氏がウイグル字本秘史から一旦パク・パ字本に改寫され、それから再び漢字音譯本に轉寫されたと反駁した。

ウラヂミルツォフや内藤湖南も此の見解であつたと云う。しかし此の説を言語學上より強く主張されたのは服部四郎教授であるが、博士は此の説に反對された。即ち、服部教授がパク・パ字本原典説を主張された據點を一々廣い範圍から事例をあげて反駁し、「パク・パ字本文献の言語と秘史のそれとが多くの點において一致する點はポッペの指摘せる如く、同一期の同一方面を、同じプリンスブルで音寫した結果であつて、必ずしも現本秘史の漢字音譯では、パク・パ字に轉寫されたるテキストから行われたものでない」と力説してウイグル字本原典説を擁護しておられる。だが問題は未だ残るのであつて後に再びふれてみたいと思う。

第十一章 「元朝秘史の漢譯」では、元朝秘史の本文の右側にある直譯と各節末にある大章譯の漢譯について詳しく考察して、直譯は未だ見ない新方法で漢譯されている事を指摘し、併せて兩譯の擔當者は同一人でないとの結論に達せられた。

ところで、本書の重點は後半におかれていることは間違いないが

その後半部の中でも博士が最も意を注がれた研究の一つは漢譯元朝秘史の原典問題であらう。既に紹介したように、服部四郎教授のバク・パ字本原典説に對して、博士はウイグル字本原典説を主張された。そして現今の學界の趨勢は後者の説の支持に落着きつゝあるのは事實である。しかしながら、前にも少しふれたがバク・パ字蒙古語文獻と秘史とを言語學の上から比較考察し、秘史の原典がバク・パ字によつて書かれたと速断してはいけなさと強調したポツペ教授が、その後或はバク・パ字に一旦轉寫されたかも知れないと、その説に動搖を示した事が端的に示しているように、それは兩説ともに證據が稀薄であつた事實を明示していると言ねばならない。又、博士自身も言語學よりの證明には限度があるのを認められ、「歴史的事實として説明されるか、それが不可能であれば、尠くとも歴史的可能性を論證しなくてはならない」と述べられた後で、多くの資料から「世祖以後はウイグル式蒙古字が依然バク・パ字を凌駕して盛行していた」故に「バク・パ字轉寫説が尠くとも、歷史上その可能性が乏しいと斷ぜざるを得ない」としておられる。しかしここで納得のいかないのは、それ等の資料から當時ウイグル式蒙古字が依然使用され勝ちであつた事は推察出來ても、果して盛行していたと決定的に結論することが出来るかどうかという事である。まして元朝爲政者がとにかく厳しく使用を命じたバク・パ字である。それに博士は一三三五年の張應瑞の碑文や、一三三八年の竹溫臺神道碑がウイグル式蒙古字であるのは、その證據であるとしておられるがそれなら一二六七年の龍門神禹廟安西王令旨碑を始めとして、一三〇五年の海山懷罕王令旨碑、一三一四年の河南安陽の善應儲祥宮聖旨碑、同じく一三一四年の大重陽萬壽宮の聖旨碑、そして、ダルマ

バラ太皇太后懿旨を始めとして一三五一年の元朝末期の碑文、外にヘーニシユ教授によれば一三三二年の聖旨も、そのいずれもがバク・パ字で書かれていた筈である。ペリオを始め諸學者がバク・パ字は盛行しなかつたと考えた事は、ポツペ教授も述べたように必ずしも當らないように思われ再検討する必要があるのではなからうか。又、たとえウイグル式蒙古字が盛行したとしても、これだけの根據ではバク・パ字の碑文が多くあるからには、バク・パ字轉寫の可能性も出てきて、ウイグル字本秘史原典説が決定される歴史的可能性としての論證にはならないと思われるのである。

しかるに、やはりウイグル字本秘史原典説が正しいとしたら、一體どのように此の結論の導き方を説明すればいいのだらうか。しかも總ての資料が出しつくされ、あらゆる論議が終つてゐるし、現在これ以上歴史的事實の説明を可能ならしめる術はないのである。殘る方法として、小林・服部兩博士の言語學上から對立した論點を——たとえ、小林博士の見解に、より多くの妥當點があるのを十分認めるにしても——双方に矛盾なく解決する方法の發見から考察を進めねばならないのではなからうか。

ともあれ、本書の研究は洋の東西を通じて最新のしかも最高の學說である事は間違いない。その餘りにも高い研究に對して言語學の門外漢の筆者が「めくら蛇におじす」の批評を敢えてした非禮と、淺學のため眞意を十分くみとれず正しく紹介出來なかつたふがなささとを重々おわびしたい。最後に御教示を頂いた山崎忠先生に謝意を表するとともに、若し論旨に間違ひあれば筆者の不注意のためである事を附記して紹介をおえる。

(井ノ崎隆興)